



100年先のYMCAキャンプを つくるあなたへ

粥川 道子

Kayukawa Michiko

北海道YMCA 評議員
北海道キャンプ協会会長
元北翔大学生涯スポーツ学部教授
元札幌YMCA
国際ビジネス社会体育専門学校講師
元神戸YMCA 野外活動部門専任講師

▼神戸YMCAで学んだ幸運な時間

1982年、神戸YMCAに非常勤ながら野外活動部門のプログラムディレクターとして採用されました。「民主主義教育の実現」を掲げて余島キャンプ場をつくられた今井鎮雄総主事が研修会でお話しされた「北米キャンプ史」は、講義ノートをつくって幾度も読み返しました。

1984年、代わられた古谷武雄総主事の下、神戸YMCA専任講師となり1987年まで日常野外活動クラスと余島・沼島両キャンプならびにスキーキャンプを担当させていただきました。オフィスの机の前には三宮ランチ主任の山口徹主事（後に神戸YMCA総主事）、余島キャンプ長の近江岸建助主事（故人）、体育部門主任・沼島キャンプ長の柳敏晴主事（現神戸常盤大学教授）が並ばれ、三役そろい踏みといった感がありました。

お三方のユーモア満載の日常会話からキャンプに限らずYMCAの理念や精神といったものを数多く学びました。



現在の余島キャンプ場



神戸YMCAでは正式な職員研修会だけでなく、若い指導職員のために朝食会が定期的に行われていました。ある朝、顧問となられた今井先生からトフラーの「第三の波」の読後感を求められ、ドキマキしたことなど今も鮮明に覚えています。

朝食会はYMCAが市民へより良いサービスを提供するために必要なスタッフ同士の研鑽の場であったと思います。今でいうアクティブラーニングのような形でキャンプを含むすべてのプログラムは目的ではなく手段であること、個々のプログラムテーマは時代の要請を見極めてつくること、この大切な二つの視点を心に刻むことができました。

日本で「野外教育」という用語が使われ始めたのが1996年ですから当時の意識ではキャンプ指導者として歩みはじめたというべきかもしれませんが、私にとっては、野外教育指導者として歩みはじめたばかりの時期に神戸YMCAで偉大な指導者と多くの主事の方々から直接学びの機会を得られたことは、本当に幸運でした。

▼伝統あるキャンプの中で

神戸YMCAが所属する関西組織キャンプ研究会は、「組織キャンプとは、社会的に責任のある組織、団体が何らかの教育的意図、目的を掲げ、その目的が効果的に達成できるように十分な計画と準備を行い、計画から実施にいたるプロセスにおいて、キャンプの組織、責任、指導体制を明確にし、キャンパーの正しい把握と理解にもとづいて、プログラムを展開し、それらすべてを統合してよりよく機能しているキャンプ」と定義しています。

40年前の神戸YMCAは、まさにこの組織キャンプを遂行していました。

日本の組織キャンプをけん引してきた日本YMCA同盟の中でも先駆的な役割を果たしてきたブランチの一つでしたから当然と言えば当然でした。

この伝統のある神戸YMCA野外活動部門の中で、プログラムディレクターとなって4年目の1986年、三宮ランチ主任となられた柳主事から沼島キャンプ場で「ガールズウエルネスキャンプ」を企画するよう言われました。YMCAで女子だけを対象にしたキャンプ、スタッフ構成も9割が女性、4名のスーパーバイザーもすべて女性というキャンプです。私自身は中高生の6年間ガールスカウトで女性だけのキャンプを経験していましたが、YMCAのプログラムディレクターとしては、難題を突き付けられた思いでした。

準備にむけた初めてのリーダーミーティングでは男女を問わずボランティアリーダーから反対の意見が多数でできました。「なぜYMCAで女性による女性のためのキャンプなのか」、「女性だけという意味がわからない」等々、プログラムディレクターの私自身が「えっ」と思ったぐらいですから当然です。自ら答えのないまま、ひたすら彼らの意見に耳を傾けました。話合う過程で「余島キャンプ場には1953年から長期少年キャンプがあるのに、なぜ長期少女キャンプがないのか」との疑問やウエルネスに視点をおいた「女性のためだけのウエルネスってあるの」から始まり、「自らの性を正しく理解することは男女どちらにも大切なこと」などの意見がボランティアリーダーから出されるようになったと記憶しています。新しいテーマのお蔭でキャンプの目的を徹底的に話合えた良い機会でした。

リーダー達の合意を得て実施した「ガールズウエルネスキャンプ」の成果は、当時、日本YMCA同盟のWellness Newsに報告させていただいたので割愛しますが、同じ年、余島キャンプ場でも第1回長期少女キャンプ「アイランダース」を実施しました。「ガールズウエルネスキャンプ」も「アイランダース」もプログラムディレクターとして組織キャンプの定義を理解していたつもりでいた私の理解度の浅さに気づけた大切なキャンプとなりました。

キャンプを企画する際に何気なく唱えていたニーバーの祈りの一説「神よ、変えることのできないものを静穏に受け入れる力を与えてください。変えるべきものを変える勇気を、そして、変えられないものと変えるべきものを区別する賢さを与えてください」をそれまで以上に心に刻んで臨むようになりました。

指導者としての未熟さに気づけたのは、キャンパーの成長のために一生懸命考え続けるボランティアリーダーの真摯な姿勢のお蔭だったと思います。神戸YMCAの偉大な指導者とキャンプの伝統の中で育てられた多くボランティアリーダーに出会えたことに心から感謝しています。



▼100年先のYMCAキャンプをつくるあなたへ

その後、縁あって北海道へ移り、専門学校と大学で野外教育やキャンプの理論と実践を学生たちに伝えてきました。1992年には札幌YMCAの秋葉聡志主事（現北海道YMCA総主事）はじめ他団体のキャンプ指導者有志と共に北海道キャンプ協会を設立しました。

今は、多くの高等教育機関で野外教育関連科目が開講され、国公立の青少年教育施設やYMCAを含む従前からの民間団体に加え、民間企業、NPO団体が増えました。各々の団体が冒険教育や環境教育をメインとした特色ある事業を展開しています。北海道キャンプ協会もそれら多様な団体の指導者会員によって支えられています。

YMCAキャンプの変わらないテーマは「個の成長」であり、ボランティアリーダー、スタッフの変わらない役割は「キャンパーの全人的成長の支援」と捉えています。これらは100年先も変わらないものとしてYMCAキャンプの根幹にあると思います。そしてこれからの100年を見据えて「YMCAらしいキャンプ」を考えることは、大変でしょうがその分やりがいも多いと思います。これからのYMCAキャンプをつくる若いスタッフやボランティアリーダーの方々へニュージャージー州立野外活動センターの食堂に掲げられたメッセージを贈ります。

If you are thinking a year ahead, sow seed.

一年先を考える人は種をまきます

If you are thinking 10 years ahead, plant a tree.

十年先を考える人は木を植えます

If you are thinking 100 years ahead, educate the people.

百年先を考える人は教育に携わります

31年前の私はこの言葉によって自分の進むべき道に迷いがなくなり誇りが持てるようになりました。今の私は「キャンプは教育の方法原理」そのものだと捉えています。



2016年 余島で開催された全国YMCAリーダー研修会

神戸YMCA野外活動部門に採用されるまでのプロフィール

1979年プロのキャンプ指導者になりたい一心で大学卒業後4年間勤めた母校を辞め、神戸YMCAの門をたたく。初めの2年間は体育部門の非常勤講師として日常の水泳クラスなどを担当しながらボランティアリーダーと共に幼児キャンプや中高生スキーキャンプでカウンセラー経験を積む。3年目は一旦、神戸YMCAを離れアメリカニュージャージー州立野外活動センターで環境教育を、スプリングフィールドカレッジでキャンプカウンセリング等を学ぶ。帰国後の1982年、念願の神戸YMCA野外活動部門の非常勤講師となる。